



Title	中国農村における大規模観光施設の拡大による郷村観光への影響：大連市紅旗鎮を事例として
Author(s)	張, 広帥; 森重, 昌之
Description	日本計画行政学会第34回全国大会. 平成23年9月10日～平成23年9月11日. 中央大学後楽園キャンパス, 東京都.
Relation	日本計画行政学会第34回全国大会研究報告要旨集. pp. 385-388.
Issue Date	2011-09-11
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/50203">https://hdl.handle.net/2115/50203</a>
Type	conference paper
File Information	JAPA34.pdf



# 中国農村における大規模観光施設の拡大による郷村観光への影響 —大連市紅旗鎮を事例として—

Impacts of Large Scale Tourism Facilities on Rural Tourism in the Chinese Countryside  
: Case Study of Hongqi Zhen, Dalian in China

○張 広帥（北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院観光創造専攻博士後期課程）  
森重 昌之（阪南大学国際観光学部）

## 1. はじめに

中国東部沿岸に位置する大連市は、改革開放政策の一環として、1984年に大連市経済技術開発区が設置され、国内でもいち早く経済成長を成し遂げた。観光分野においても著しい成長が見られ、2010年の観光総収入は560億元（約7,000億円）と、前年比16.7%の増加であった。いまや、大連市の観光産業は市内総生産額の10%以上、第3次産業の26%以上を占め、地域経済に与える影響も大きくなっている。

大連市政府は観光客の多様なニーズに対応するため、マスツーリズムのような大規模観光だけでなく、新たな形態の観光も推進しており、その1つとして「郷村観光」があげられる。郷村観光とは、「主に地域住民が主体となって農村の特徴を持つ地域で行われる、自然環境や農業、景観、文化などの地域資源を活用した観光形態」であり（張 2010a）、三農問題の是正に向けた農民の生活水準の向上や都市・農村交流の手段として注目されている。大連市政府は大規模観光と新たな観光の両立をめざしているが、張（2010b）によると、大規模観光施設の規模拡大による経済成長を重視するあまり、郷村観光の発展を阻害するさまざまな悪影響が懸念されている。

本研究では、大連市甘井子区紅旗鎮柳樹村にある大規模観光施設の規模拡大によって、隣接する岔鞍村の郷村観光にどのような影響が予想されるかについて考察する。そのため、紅旗鎮の観光に関する文献資料などを収集・分析するとともに、柳樹村の大規模観光施設であるC温泉観光施設や土地開発業者、地域住民への聞き取り調査を実施した。その上で、大連市における今後の観光政策の方向性を示すことを目的とする。

## 2. 岔鞍村の郷村観光の状況

紅旗鎮は大連市西部に位置し、面積が85km<sup>2</sup>、人口が約10万人で、森林面積が66km<sup>2</sup>である。紅旗鎮の中にある岔鞍村は、面積が28km<sup>2</sup>、1,800世帯、5,400人が暮らす村であり、山に囲まれた地形で、山々から流れる河川によって水資源も豊富である。岔鞍村は郷村観光の名所として知られており、大連市の「春に行くべき19ヵ所」の1つに取り上げられている。また、果樹面積が140haを占め、サクランボ、リンゴ、ナシ、モモなど、さまざまな果物を生産していることから、岔鞍村は「北方果物の郷」と呼ばれている。

岔鞍村では、農産物だけでなく、豚や鶏も含めた自給自足の生活や農家らしい家屋、庭など、自然に囲まれた農村生活を体験できる。そこで、2000年頃から大連市政府や紅旗鎮

政府が岔鞍村の農民に対し、すでに郷村観光に取り組んでいる地域への視察や職業訓練をバックアップしたほか、経営の許可を簡素化するなどして、郷村観光の導入を積極的に支援した（張・森重 2010）。その結果、岔鞍村では現在、約 40 戸が郷村観光として農家レストランや収穫体験、農家民宿などの事業を営んでいる。このように、岔鞍村の郷村観光の設立には大連市政府や紅旗鎮政府が大きく関与している。

しかし、大連市旅游協会元理事長の S 氏や岔鞍村の郷村観光のリーダーである Z 氏によると、大連市政府がより高い経済成長を求め、大規模観光の推進や郷村観光事業者の統合などを図ろうと考えているため、小規模事業者の個性を生かした郷村観光を継続できない可能性が出ている（張 2010b）。実際、大連市政府や紅旗鎮政府は近年、岔鞍村に隣接する柳樹村において、C 温泉観光施設の規模拡大を支援している。そこで、次に C 温泉観光施設の規模拡大の概要を整理する。

### 3. C 温泉観光施設の状況

紅旗鎮柳樹村は、岔鞍村と同じように自然に囲まれた地域であるが、温泉が湧出することから C 温泉観光施設が建設され、現在では柳樹村の観光のシンボルになっている。C 温泉観光施設は、土地開発事業を中心に建設業やレジャー産業などを展開する S 企業グループの 1 つの事業として運営されている。S 企業グループは 1995 年から大連市政府の支援を受け、約 2 億元（約 25 億円）をかけて C 温泉観光施設を建設した。さらに 2 億 5,000 万元（約 31 億円）の投資によって、2010 年 12 月には第 2 期温泉施設も開業した。その結果、現在の規模は面積が 40 万 m<sup>2</sup>、施設内には 15,000m<sup>2</sup>の温水プールや 20,000m<sup>2</sup>の露天風呂、宿泊施設、5,000 人収容の会議室、別荘などがある。また、「大連西郊国家森林公园旅游全体計画」によると、年間 125 万人の受け入れを見込んでいる。

C 温泉観光施設は観光客を大量に受け入れる体制を強化しており、観光施設の入浴料や宿泊料を比較的安価に設定している。また、マスメディアを通じて、C 温泉観光施設の泉質や自然環境の良さが積極的に伝えられている。こうした効果もあり、C 温泉観光施設の従業員によると、個人・団体観光客とも増加傾向にあり、大連市内を中心とした近隣の観光客が訪れている。なお、団体観光客は 1 日中施設内で過ごすことが多く、周辺の観光地へ足を運ぶ人は少ないとのことであった（2011.5.16 聞き取り調査）。

一方、「2011 年大連市旅游活動に関する報告会議」によると、C 温泉観光施設の継続的な規模拡大、郷村観光の大規模化・標準化といった大型プロジェクトが観光政策の中心に位置づけられている。このように、C 温泉観光施設は大連市政府の政策的なバックアップのもと、順調に拡大してきた。こうした規模拡大とともに、隣接する土地には 1 年中温泉水が利用できるマンションが建設されている。紅旗鎮の土地開発業者 Q 氏によると、C 温泉観光施設の拡大によって周辺の地価は 3 倍に上がり、紅旗鎮の中でもトップクラスの価格帯である（2011.5.16 聞き取り調査）。このように、柳樹村では温泉観光施設と住宅建設が同時に進められている。

#### 4. C 温泉観光施設の規模拡大による郷村観光への影響

C 温泉観光施設は、建設段階から大連市政府や紅旗鎮政府の支援を受ける一方、S 企業グループは年間収入の 35%を納税するなど、政府の歳入増加に大きく貢献してきた。C 温泉観光施設は現在、紅旗鎮の主要な観光資源になっており、地域外に観光情報を発信する際の媒体として活用されている。また、C 温泉観光施設を利用する観光客数も増加しており、大連市の観光を支える施設の 1 つとして、地域経済にもプラスの効果を与えている。

このように、経済面でさまざまな効果をもたらす C 温泉観光施設であるが、マンションも含めた土地開発によって、郷村観光や地域社会にさまざまなマイナスの影響が懸念されている。1 つは、郷村観光の基盤となる「資源」の喪失である。郷村観光では、周辺で栽培される野菜や果物を収穫したり、食べたりする体験が見どころであるが、観光施設やマンションの建設によって農地や山林が失われている。また、農村らしい民家が次々と壊され、農村景観の破壊につながっている。今後、こうした土地開発が岔鞍村に広がることが予想されるが、こうした農地や山林、民家は郷村観光事業者が所有していないものが多く、事業者自身で保全することが難しい。こうした資源が失われることで、郷村観光の継続が困難になる。

また、郷村観光が持つ自然環境や農業、景観、文化などの「イメージ」の崩壊である。前述したことに関連するが、マンションが建設されることによって、都市住民が大量に移住し、マイカーを利用して都心部に出かける光景が見られるようになった。マイカーがクラクションを鳴らしながら頻繁に往来する様子は、農村らしいのどかな光景を損ない、郷村観光のイメージを壊してしまう。また、C 温泉観光施設やマンションの建設中は周辺に巨大なクレーンが建てられ、工事用車両が道路を通り抜けていく。前述した Q 氏によると、観光客がマンションの建設と郷村観光施設の建設を勘違いして、郷村観光への参加を断念するケースもあるという（2011.5.16 聞き取り調査）。さらに、C 温泉観光施設の積極的な情報発信によって、紅旗鎮の「のどかな農村」というイメージも薄れつつある。郭（2009）も、C 温泉観光施設を中心とした「柳樹村の観光はすでに郷村観光の発展を阻害している」と指摘している。

さらに、地域内の連携やネットワークの欠如も指摘できる。観光客がせっかく紅旗鎮を訪れても、前述したように C 温泉観光施設の団体観光客の多くは 1 日中施設内で過ごすため、観光による地域全体への波及効果が小さい。また、観光客に岔鞍村の郷村観光や地域文化の魅力を伝えることも難しくなっている。

加えて、Q 氏は「C 温泉観光施設付近の河川の水質が悪化しているとの報道があった」と語っていた（2011.5.16 聞き取り調査）。その原因は特定できていないが、松村（2010）は四川省の農村に立地する観光施設によって地域の水質汚染が深刻化し、農業や漁業への悪影響が出ていることを調査し、環境保全への配慮の必要性を指摘している。水質汚染は当然、郷村観光の推進に悪影響を及ぼすことになる。「大連西郊国家森林公园旅游全体計画」や C 温泉観光施設が作成する資料には、環境対策の内容が一切示されていないことから、まずは水質汚染の原因の特定が求められる。

## 5. おわりに～今後の観光政策の方向性

本研究では、大連市甘井子区紅旗鎮を事例に、大規模観光施設の規模拡大が郷村観光に及ぼす影響を考察した。その結果、C温泉観光施設は紅旗鎮の主要な観光資源として、地域外に観光情報を発信する際の媒体として活用されている。また、大連市の観光を支える施設として経済的にプラスの効果をもたらしていた。その一方、郷村観光の基盤となる農地や山林、民家などの固有資源が土地開発によって失われ、郷村観光の継続が困難になっている。また、郷村観光が持つ豊かな自然環境やのどかな農村といったイメージが崩壊しつつある。さらに、C温泉観光施設の団体観光客は1日中施設内で過ごすため、地域全体への波及効果が小さいといった地域内連携の欠如、環境汚染に対する懸念なども指摘した。

今後、大連市政府や紅旗鎮政府には、大規模観光施設が地域に与える悪影響を抑制しながら、郷村観光をはじめとする新たな観光を推進することが求められる。そのためには、首尾一貫した観光政策を立案することが必要であろう。これまで見てきたように、大連市政府や紅旗鎮政府は郷村観光を積極的に推進する一方で、大規模観光施設に対しても支援を続けてきた。大連市全体を視野に入れると、大規模観光と新たな観光は両立できるかもしれないが、隣接する村で異なる形態の観光を推進すると、両者の矛盾が発生しやすい。

また、大連市の観光の現状にかかわらず、国家政策が変更されるたびに、大連市の観光政策の方針も大きく転換してきた。これは、現在の中国の制度的特徴として受け入れざるを得ない面もあるが、大連市政府や紅旗鎮政府の支援を受けて郷村観光を推進してきた農民にとっては、政策転換が死活問題につながりかねない。また、こうした一貫性を欠いた観光政策は、大規模観光施設にとっても事業継続の不安定要因になるであろう。

一方、長期的視点に立てば、大規模観光施設のさらなる規模拡大ではなく、郷村観光をはじめとした新たな形態の観光の推進にシフトしていくことが望まれる。なぜなら、大規模観光施設の規模拡大による悪影響は、マスツーリズム時代の典型例として欧米諸国や日本でたびたび批判されてきたからである。その意味では、マスツーリズムの全盛期を迎えようとしている現在の中国で、郷村観光のような新たな観光にも目を向けていることは評価できよう。それを経済的効果だけでなく、環境面や社会面でも効果があることを認識する必要がある。

このように、観光が持つ多面的効果を理解した上で、郷村観光をはじめとする新たな形態の観光を核に、一貫した理念やビジョンを持つ政策を立案し、地域住民に示すことが、これからの大連市の観光政策に求められる姿といえよう。

### 【参考文献】

- 郭那 (2009) 『旅游村特色化建設及空間競合關係研究』 東北財済大学修士論文, 74p. [中国語]
- 松村嘉久 (2010) 「観光開発の現状と課題」 石原潤編 『変わり行く四川』 ナカニシヤ出版, pp.175-203.
- 張広帥 (2010a) 「郷村観光の定義とその重要性に関する一考察」 『北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集』 第6号, pp.83-90.
- 張広帥 (2010b) 「城中村における郷村観光の実態と課題—中国・大連市岔鞍村を事例に」 『第25回日本観光研究学会全国大会学術論文集』, pp.221-224
- 張広帥・森重昌之 (2010) 「中国の新農村建設における郷村観光の重要性に関する研究—大連市を事例として」 『日本計画行政学会第33回全国大会研究報告要旨集』, pp.133-136.